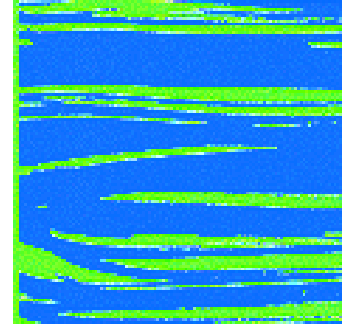


日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2007年 夏号 No. 47 (2007年8月29日 発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

2007年度 日本行動分析学会 第25回年次大会および総会を終えて 藤 健一

2007年度各委員会活動方針

機関誌編集委員会より 真邊一近

研究教育推進委員会より 浅野俊夫・島宗理

国際・渉外委員会より 杉山尚子

倫理委員会より 鎌倉やよい

広報委員会より 望月 要

第4回学会実践賞を受賞して (1) 朝野 浩

第4回学会実践賞を受賞して (2) 勿田文記

第5回日本行動分析学会実践賞 候補者公募のお知らせ 研究教育推進委員会

第25回年次大会へのご参加、ありがとうございました 堀 耕治

特集号『エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端』に掲載する展望論文の公募
のお知らせ 研究教育推進委員会

ABA 体験記 (1): 人も建物も ABA も大きな国アメリカ 村本浄司

ABA 体験記 (2): ABA への参加を終えて 丹野貴行

連載: いま, こんな研究しています (2) 吉岡昌子

自著を語る: 『行動分析』ならびに『機能分析心理療法』 大河内浩人

次号からの j-ABA ニュースの読み方 広報委員会

j-ABA ニュース発行を知るための RSS 設定の方法 廣江美恵

事務局長交替のご挨拶 武藤崇・大河内浩人

事務局だより 事務局

編集後記 ニュースレター編集部

重要 次号から j-ABA ニュースは電子版と冊子体の2本立てになります。冊子体配布の継続を希望される方は、申し込みが必要です。詳細は16ページの記事をお読み下さい (広報委員会)

2007 年度 日本行動分析学会 第 25 回年次大会および総会を終えて 理事長 藤 健一

今夏は例年になく猛暑となりました。日中は 35 を超える炎天ではありますが、それでも 8 月も半ばを過ぎると、朝夕の風にも心なしか涼しさが感ぜられます。

さて、今年度の年次大会が 8 月 4 日、5 日の日程で、立教大学の新座キャンパス（現代心理学部）において開催されました。今年度の学会の事業方針などにつきましては、4 日の総会において審議され承認を戴きました。

2007 年度は、現理事会の任期の中間年にあたる年度であり、昨年度の総会において承認を戴いた事業計画を実行し、また具体化を進める重要な時期です。今年度の基本的計画項目は現理事会の基本方針を踏まえて、(1) 行動分析学会の学術研究の活性化、(2) 行動分析学会と関連諸学会との連携と学会広報の推進、(3) 学会事務局体制のあり方の検討、の三つの項目を挙げました。

まず、学術研究の活性化につきましては、「行動分析学研究」と「ニューズレター」の発行、学会の出版計画の具体化、年次大会・各種公開講座・研修会などの開催、学会賞の選考を行ないます。

諸学会との連携に関しては、本学会主催の研修会（ワークショップ）のうちいくつかを「学校心理士認定」に関わる研修会として申請することとなりました。また、本学会も参加しております日本心理学諸学会連合（日心連）が 2008 年から実施する心理学検定事業にも参画することとなりました。日心連では、包括的な心理学の資格に関わる検討が、今年度からその第 2 段階へと進みつつあり、行動分析学会としてもその動向に注目する必要があります。さらに、今年度も引き続き、本学会学生会員の ABA をはじめとする国外学会参加助成事業を実施致します。

学会広報の推進については、現在「行動分析学研究」の彙報欄、ニューズレター、学会ホームページとある、会員の皆様に対する広報体系を、その特性に応じた形で整備再編成を行ないます。ニューズレターの配布方式についての新しい提案も、今号の別記事において解説されております。また、学会内外の行動分析学に関心のある方々を対象として、行動分析学の学べる国内の大学についてのデータベースの構築を開始致しました。同様の主旨で、以前より「行動分析学研究」に随時掲載しておりましたが、会員が最新のデータをいち早く取得出来るようにするために、オンラインで調べられるようにしました。

学会事務局体制については、具体的には学会業務の一部を、外部委託することの可能性について検討を行ないます。既に事務局では複数の業者と相談をしましたが、800 名程度の会員規模では、かかる経費と委託業務量との兼ね合いから、判断が難しいというのが現状です。

さて、2 日間の年次大会期間中に、計 378 名の参加者がありました。内訳は、一般会員 141 名、学生会員 140 名、非会員 97 名とおおくの皆様方の参加がありました。7 月 7 日現在の会員数が 792 名ですから、正会員の学会参加率は、約 35%ということになります。また、年次大会に先立つ 8 月 3 日には公開研修会が開催され、参加者 111 名と盛況でした。年次大会での主要な行事については、このニューズレターの別の記事で紹介がありますので重複をさけますが、講演（A・チャールズ・カタニア先生）2 件、シンポジウム 2 件、研修会 2 件、ビデオ上映会 1 件、研究発表 76 件（延発表者数 208 名）、学会賞授賞式および記念小講演 3 件（2 団体、1 個人）、総会、懇親会という多様な行事で、大変有益な 2

日間となりました。

学会に参加して感じたことの中で、印象に残ったことを最後に述べたいと思います。大会会場のあちこちを回ったのですが、熱心な若い参加者（会員と非会員）の比率が年々高まっているという印象を持ちました。これは、ポスター会場の様子や、学会事務局の受付（新入会受付や学会誌販売など）、また懇親会での様子を見て、特にその感を強くしました。こういった若い会員の方々にとっても、行動分析学会の学術研究所産が利用し易い形態で提供されるような環境をさらに整備することが、今後の日本行動分析学会と行動分析学の発展に欠かせない

と、強く感じた次第です。

さて、来年度の第26回大会は、横浜国立大学（準備委員長 林部英雄先生）で開催されます。横浜市で年次大会が開催されるのは、本学会においては初めてのことです。横浜でも今回と同様に、年次大会を皆様にとって意義あるものに致したく存じます。

最後に、今回の年次大会運営にあたられた大会準備委員長の堀耕治先生、委員会の大石幸二先生はじめ立教大学の学生、院生の皆様方に、深く感謝を致します。ありがとうございました。（2007年8月18日記す）

2007年度各委員会活動方針

機関誌編集委員会より

真邊一近

今年度は、以下の3点を目標として掲げました。

1. 1年2号の出版を維持する。
2. 一般論文投稿を促進する。
新たに設けた研究報告（Research Reports）の投稿を促進する。
3. 特集号を出版し、会員に最新の情報を提供する。
研究活性化・企画委員会・大会準備委員会・各編集委員および理事、さらには一般会員

から特集号のテーマのご提案をいただき、実現性の高いものから順次出版する。

幸い、今年度はすでに3巻出版し、これまでの遅れを取り戻しました。これもひとえに会員の皆様のご協力の賜と感謝申し上げます。今後も、定期的な発刊を心がけていきますので、なにとぞ、積極的なご投稿をお願い申し上げます。特に、新たに設置した研究報告のご投稿をお待ちしています。

研究教育推進委員会より

浅野俊夫・島宗理

1. 公募型の公開講座の開催
日本全国各地で開催できるよう広報し、開催を支援します。
2. 委員会企画の公開講座やシンポジウムの開催

- 年次大会において行動分析学のエビデンスに関するシンポジウムを開催しました。
3. 学会賞
実践賞の募集と選考を行います。
4. 行動分析学が学べる大学の資料

- 広報委員会と協力して更新作業を進めます。
5. 学会活動のアーカイブ化
学会の活動記録が目で見えてわかるように残せるシステムをつくりまます。
 6. 行動分析学のエビデンス
発達障害と支援に関する行動分析学のエビデンスの整理を支援することを目的に、上記(2)の内容を機関誌にまとめる仕事を支援します。
 7. 行動分析学の卒論・修論のデータベース化
広報委員会、編集委員会と連携して、行動分析学の卒論・修論のデータベース化を進めます。 http://j-aba.jp/cgi-bin/s_data/s_data/ (現在準備中です)
 8. 他学会との連携
公開講座もしくは委員会企画の公開講座として、少なくとも1つを学校心理士の継続講習会として開催します。

国際・渉外委員会より

杉山尚子

1. ABA への 2006 年度事業報告 / 2007 年度事業計画レポート提出します
2. ABA 年次大会で開催される ABA Expo において、J-ABA の活動を紹介するポスター展示を行います。
3. ABA2005 大会期間中に開催される International Development Committee ならびに Affiliation Chapter Meeting にリエゾンとして出席します。
4. 中国 ABA、韓国 ABA、台湾 ABA との情報交換を推進します。
5. 「日本在住学生会員 ABA 参加助成事業」における、公募、選考を担当します。
6. 海外在住の日本人学生に対して、日本における行動分析学の現状に関して情報提供します。

倫理委員会より

鎌倉やよい

2007 年度の活動計画は以下の 2 点です。

1. 倫理問題に関する情報を収集し随時会員に提供する。
2. 倫理問題に関する研修会を開催し、関連学会会員に開放して論議を活発化する。

「活動計画 2」については、まず行動分析学会で倫理問題に関する研修会を実施して、関連他学会会員(日本動物心理学会、日本動物行動学会、日本基礎心理学会)には参加を求め、他学会においても研究倫理に関する議論が活発となるよ

うに呼びかけることが目的です。

具体的企画として、日本行動分析学会第 25 回年次大会において、「行動分析学と獣医学の立場からみた動物実験における倫理問題」をテーマに研修会を開催致しました。動物実験を行う行動分析学の立場、動物の治療を行う獣医学、人の臨床研究に関わる看護学の立場から話題提供し、話し合いの場とし、関連他学会からの参加を求め、参加者には参加証明書を発行致しました。

ここで出された意見について、さらに論議していく予定です。

広報委員会より 望月 要

(0) 媒体の機能分化を明確化する

現在、日本行動分析学会は、学会ウェブサイト、ブログ、ニュースレターという3種類の広報媒体を持っています。今まで、この3つを特に区別せずに使って参りましたが、今後は、媒体の特長に応じて、速報性を要求される情報は、ヘッドライン的部分をブログで、詳細情報をウェブサイトに掲載し、ニュースレターには、報告、提案、連載企画など、速報性よりも記録性を重視する記事を掲載するように変えています。

(1) ニュースレター

今年8月の会務総会で、電子配布の併用が承認されました。これを受けて、次号より電子配布を実現致します。発行は、従来どおり年4回とし、現在連載中の企画：若手研究者による研究紹介とは別にもう1つ、海外情報として海外で行動分析学を研究あるいは学んでいる会員による連載を実現したいと思います。

(2) 学会ウェブサイトの管理・運営

基本的に現状を維持しつつ、提供情報の取捨選択を行なってスリム化を検討します。同時に

他の委員会と協力して、データ検索など、より進んだ機能の実装を試みて行きます。

(3) 「行動分析学が学べる大学」運営の改善

研究教育推進委員会より運営をバトンタッチしました。運営上最大の問題は、なかなか最新情報をお寄せ戴けないことにあります。今後は、次年度シラバス作成時期に合わせて催促メールで情報更新をお願いする、情報量を削減し、提供者のコスト低減をはかる、といった対策を講じたいと考えております。多くの大学がシラバスを公開するようになってまいりましたので、詳細な情報は、そちらにお任せすることに致します。また、会員名簿を元に、行動分析家が教員を務める大学のリストの作成を検討しております。

(4) メーリングリストの新設

今年8月の会務総会で、日本行動分析学会が、非会員でも参加できる行動分析学全般のメーリングリストを設置することが承認されました。常任理事会で、運営規約などの詳細を確定し、なるべく早い時期に開設する予定です。

第4回学会実践賞を受賞して (1)

京都市立総合支援学校 (全7校) 代表 西総合支援学校長 朝野 浩

貴日本行動分析学会において、京都市立総合支援学校7校が、名誉ある第4回実践賞を授与されるにあたり、京都市立総合支援学校教職員並びに保護者、児童生徒を代表しまして、藤理事長はじめ関係各位に、心より御礼申し上げます。

また、我々を推薦して下さった大阪人間科学大学の谷晋二先生をはじめ、立命館大学の望月昭先生、武藤崇先生、筑波大学の藤原義博先生、文教大学の霜田浩信先生という、日本の行

動分析学の最先端におられる諸先生方のご厚意に深く感謝を申し上げます

さて本年平成19年4月から、学校教育法の一部改正に伴い、これまでの盲学校、聾学校、肢体不自由・病弱・知的障害の養護学校が、障害種別を超えた特別支援学校として新たにスタートしました。

しかし、これより以前に、京都市では全国に先駆けて、今から8年前の平成11年度より、ノー

マライゼーション社会の実現を目指し、障害のある子供たちを我々と同じ地域に住む『生活者』として捉え、養護学校における障害種別を超えた総合化と、住んでいる生活の場により近いところでの学びを大切に教育としての地域化に取り組んでまいりました。と同時に、文部科学省より、現行の学習指導要領によらない教育課程の在り方と学校運営について研究することを目的に、平成12年度より、二期6年間の教育研究開発学校の指定も受けてまいりました。

その中で私たちが一番大事にしてきたことは、「障害のある子ども一人一人の生きる力と、保護者への生涯にわたる支援」を実現するために、京都市が独自に開発・設計しました「四つの生きる力」に基づく「個別の包括支援プラン」であります。

これは、従来の教育計画とは異なり、本人、保護者、我々教師や地域の関係者、諸機関が、一人一人の具体的な支援を伴うカリキュラムづくりに参画し、評価を行うものであります。

つまり、多くの特別支援学校が学習指導要領に基づいて、トップダウンで集団としてのカリキュラム、指導計画を作っているのに対し、京都市では、先ほどの三者（「三者の願い」）によって、カリキュラム・ベースを使って、ゼロ・ベースから具体的な手だてを伴う一人一人のカリキュラムを策定するものであります。

これまでの養護学校では、障害を理由とした分かり難さから、ややもすると目標の設定が曖昧だったり、授業に評価を伴わなかったりすることが多く見受けられました。そのため、所謂、ブラックボックス状態となり、養護学校教育は何をしているかが、分かりづらいとさえ思われていました。

そこで、京都市では、障害種別を超えた総合制による教育を進めるにあたり、学びの主体者である子どもや保護者にも、そして我々教師同士や関係者にも、学校でしていること、学んでいることが分かることが必要であると考えました。誰もが分かる授業、みんなが見える学校組

織を作ることで、具体的な支援が実行出来ると考え、学習内容や目標を評価可能な行動としての記述に書き変え、授業改善を行いました。

また、学んだことが、家庭や地域社会で生かされることが、地域制総合支援学校としては大切であることから、家庭・地域との連続性を目指し、障害のある子どもと保護者が、地域でより住みやすく、暮らしやすくなるように、地域を変えていくことも学校としての本来の職務と考えました。我々の意識改革は、行動を伴うことで変革されると信じ、これまでの校務分掌、学校組織をマネジメント機能の視点から「マネジメント」「ティーチング」「サポート」による部門を設置し、「総務・指導・支援」として学校運営組織を基礎構造改革しました。そのため、教職員だけでなく保護者の方々も含め、これまでに京都市の総合支援学校では、先ほどご紹介させて頂きました、また、今日も引き続きご協力頂いています沢山の先生方に、応用行動分析学の研修会のみならず、協働研究を行っています。

行動分析学の基本的な事柄にはじまり、障害特性からくる様々な問題行動を解決するための機能分析や学習活動において獲得して欲しい様々な課題分析の方法など、障害のある子どもたちに対する関わりや、また学校を、地域を、変えていく組織マネジメントに関わることも含め、よきパートナー・シップをもって多くのことに取り組んでいます。

特に思い出としては、そのなかで「強化随伴性」という言葉を初めて聞いた時のことです。学校現場では、あまり聞き慣れない言葉ですので、逆によく耳に残っていたわけです。研修会では、講師の先生方に「行動の後に起こる環境の変化」と、説明をしていただきました。「随伴性」、つまり contingency にはもともと「たまたま、偶然」という意味があるとのこと。素人の考えで「随伴性」を「偶然」に読み替えてみたことがありました。「行動の後に起こる偶然」になしえたことということ、学校教育場面では、子供たちの自発的行動に結びつくものであります。改めて

行動分析学って面白いものだなと思いました。

私たち教師は、子どもたちが何かアクションを起こした時、言葉をかけたり、微笑み返したり、時には叱ったりもします。私たちは、言葉掛けなどの行為が、子どもたちの行動につながっていて、その行動を増やしたり減らしたりすることができる、単純に思い込んでいます。しかしながら、子どもたちの目に映るものが、教師が意図していない別のもの、例えば、教師は微笑みかけているのに、子どもには隣にいる先生の怖い顔として映っているという、予想だにしないことも可能性としてあるわけです。そう思うと、子どもたちの行動と私たちの意図するはたらきかけが、その通りにつながるかどうかは本当に偶然性に任されているということになります。

それは別の言い方をすれば、もし、子どもたちの行動と教師たちの関わりが繋がったとしたら、それは「偶然起こった素晴らしい出会い」にもなるという可能性がある、と理解しました。そういう意味では、私たち教師はこの「たまたま、偶然性」をいかにして子どもたちの自発的な行動、生きる力につなげていくのかという点で、非常に重要な役割を担っており、こういうところでプロとしての力量を試されるのかと、身が引き締まる思いがしました。

もうひとつ、この随伴性、つまり「たまたま、偶然」ということについていえば、私が今、こ

の場に立ってスピーチしていることも同じことなのではないかと思っております。

今回の受賞理由にもなっております、京都市の総合支援学校7校で応用行動分析学の考え方を取り入れた実践や研修会を100回以上もしてきたこと。私の西総合支援学校が最初にはじめたのですが、全国で初めて、教員免許を持たない応用行動分析スタッフを特別非常勤講師として採用したことなど、この8年の間に様々な出会いがあり、多くの教師たちが応用行動分析学のアプローチで子どもたちに接して、子どもたちも素晴らしい成長を遂げてきました。

偶然が偶然をよんで、「今、この時」があると思うと、「偶然」という言葉以上に、非常に日本的な「縁」とでも言うべき、不思議な思いにかられるわけであります。

この「縁」に支えられた8年間は、京都市の全ての総合支援学校にいる教師たち、そして保護者、子供たちにとっての宝であります。そして、これからもこの大きな宝を大切にしていきたいと思う所存であります。

今後とも、日本行動分析学会の更なる発展を心より祈念し、実践賞を授与されるにあたっての御礼の言葉とさせていただきます。

(代表) 京都市立西総合支援学校 校長
朝野 浩
2009/8/4 立教大学志木キャンパスにて

第4回学会実践賞を受賞して(2)

高齢・障害者雇用支援機構 国立職業リハビリテーションセンター
障害者職業カウンセラー 勿田文記

今回、行動分析学会実践賞という、職業リハビリテーションサービスの現場で働く人間にとっては、本当にありがたい賞を頂くこととなり、心からうれしく思っております。

また、今回の受賞は、多くの障害をお持ちの方々や関係者の皆様、様々なご指導を頂いた先

生方、共に研究を進めてきた方々のご協力・ご支援によるものであり、これらの皆様に深く感謝いたします。

職業リハビリテーションの分野は、教育や、医療・福祉等のサービスを受けられた方々が、個々の能力をそれぞれに発揮し、生活の糧を得るた

めの重要なステージを担うものです。また、障害者雇用の実現は、障害者だけでなく事業主の方々にも相当な努力を求めることとなるため、私たちは、雇用される障害者と雇用する事業主をサービスの対象とすることになります。さらに、職業リハビリテーションサービスの結果は、障害者の職業を含めた自立を促進するだけでなく、事業主のメリットとなることが求められるため、現実的な成果（コストの削減や売り上げの増加、業務の効率化など）が上がりなければなりません。

私は、職業リハビリテーションサービスの専門家になってから、様々にある心理学の分野の中で、このような現実的な成果をあげるられる学問体系は行動分析以外には考えられない、また、職業リハビリテーションの中に行動分析学を大きな柱として位置づけることができれば、ポジティブな随伴性でお互いを支え合える企業や社会を作り上げていくことができると考え、実践

と研究を行ってきました。

これらの実践と研究の結果、行動分析学のノウハウに基づく職業リハビリテーションのツールが高齢・障害者雇用支援機構から販売されており、今後も順次発売される予定となっています。

最近では、多くの大企業が障害者雇用率を達成してきています。しかし、企業によってはそれに留まらず、さらなる障害者雇用の促進のために、グループ会社全社で障害者雇用を促進しよう、すべての事業所で障害者を雇用しようという動きも見られ始めています。また、精神障害者や知的障害者の雇用も徐々に促進されています。

このような変化をさらに後押しするために、今後も具体的な成果が上がる「行動分析学」の考え方や方法論を、当たり前で基本的なものとして、様々な形で表現していきたいと思えます。

今回は、本当にありがとうございました。

第 5 回日本行動分析学会実践賞 候補者公募のお知らせ 研究教育推進委員会

日本行動分析学会では、わが国における行動分析学を応用した実践の普及や行動分析学の啓発を目的として、日本行動分析学会学会賞（実践賞）を設けています。

選考の対象となる実践は、現代社会における課題を解決するために行動分析学を応用して顕著な実績をあげた個人または組織です。日本行動分析学会の会員である必要はありません。これからの活躍が期待できる萌芽的な取り組みも選考対象となります。

自薦・他薦は問いません。「こんな素晴らしい実践はぜひ強化しよう!」「この人たち(私たち)の取り組みを強化して下さい!」という声を、候補者推薦という形でどしどしお寄せ下さい。

Q: 推薦するためには?

A: 〆切は 2008 年 2 月 29 日 (消印有効) です。

Q: 推薦に必要なものは?

A: 候補者名と連絡先および 800 字程度の推薦文と論文やレポートなどの資料です。学会 web サイト (<http://www.j-aba.jp/>) から書式をダウンロードしてお使い下さい。

Q: 推薦書類の送付先は?

A: 学会事務局まで郵送して下さい。

選考は来年 3 月の常任理事会で行われ、来年度の年次大会にて授賞式を開催します。賞金は 5 万円です。

推薦は〆切まで随時募集しています。思いついたら吉日。皆さまからのたくさんの推薦をお

待ちしております。

ご質問・ご相談は担当理事までどうぞ。

第25回年次大会へのご参加、ありがとうございました

日本行動分析学会第25回年次大会準備委員長 堀 耕治

8月3日の公開研修会を皮切りに5日まで、立教大学新座キャンパスで開催されました第25回年次大会に、大勢の方々にご参加いただき、たいへんありがとうございました。

暑い盛りの開催時期、しかも首都圏とはいえ若干交通の不便な会場。正直なところ「集客」を心配したのですが、実際はまったく逆でした。公開研修会には当日参加を含めて111名の参加があり、年次大会の方は、会員281名、非会員97名と、合計で400名近くの、予想を遥かに越える参加者となりました。これは、われわれ

大会準備委員会にとりまして誠に「うれしい誤算」であったのですが、しかし一方ではこの誤算により、頒布用の論文集があっという間に売り切れちゃったり、講演・シンポジウム会場の収容力が追いつかなくなるなど、参加者の皆様には色々な面でご不便をおかけすることにもなりました。この場をお借りして深くおわび申し上げます。

最後に、横浜国立大学での次回年次大会の成功をお祈りして、ご挨拶といたします。

特集号『エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端』に掲載する展望論文の公募のお知らせ

研究教育推進委員会

研究教育推進委員会・編集委員会では、先の年次大会において開催したシンポジウム『エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端』の内容を、機関誌『行動分析学研究』に特集号としてまとめるべく、平澤紀子先生（岐阜大学）にアクションエディターをお願いし、さらにその他の論文を公募することにいたしました。

幼児から成人まで、また、保育/幼稚園や学校、企業、地域支援、自閉症、ADHD、LDなど、支援対象者や組織の種別などを絞り込んだ、発達障害支援に関する行動分析学における研究の展望論文をお待ちしております。

その他の研究論文につきましても『エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端』という主旨にあう論文であれば掲載を検討します。特

集号の主旨にあわないと判断した場合にも一般論文として次号への掲載を検討させていただきますのでご相談下さい。

公募〆切は11/30（金）とさせていただきます（消印有効）。〆切までに投稿いただきました論文は通常の査読プロセスを経て、来年度に刊行する予定です。

原稿は、封筒の表に「行動分析学研究特集号：原稿在中」と朱書きした上、下記までお送りください。

〒501-1193

岐阜県岐阜市柳戸1-1

岐阜大学教育学部特別支援教育センター

平澤紀子 宛

皆さまからのご投稿を心からお待ちしております。

ABA 体験記 (1): 人も建物も ABA も大きな国アメリカ 筑波大学大学院博士課程 5 年 村本浄司

「すごい!これほど発表数が多いなんて!話には聞いていたが日本とは桁違いだ。会場も嫌になるほど広いし…。」などと半ば観光気分で会場をうろろろしていると、顔に見覚えのある(プログラムの中で)ひとりの大男が私の横を通り過ぎました。「あれ?今すれ違ったのはかの有名な Dunlap 先生では?」「ん?でもあんなに恰幅が良かったっけ?もしかしてスーパーサイズミーを行動分析的に実証されているのでは?」とか勝手な妄想を抱きながら、先生の後を追跡し、「隙を見てサインをお願いしよう。」などとミーハーなことを考えてもいました。しかしながら、エスカレーターを降りてから、先生が人ごみの中に入り込むや否や見失ってしまい「う?せっかくのチャンスが…、でも話しかけられたところで自分の超 Broken English では先生も理解不能であったに違いない?」と本当は話しかける勇気がなく、わざと Slowly に歩いていて自分に逃避の理由を植えついたりもしていました。結局、直接お会いして話すこともできなかったのですが(当たり前?) ABA では当然のことながら Dunlap 先生のような、この業界の有名인들이ほとんど全員出席しています。すなわち論文を読んだだけで名前だけは存じ上げているが、顔が一致しない先生方のお話を直接聞くことが出来ます。「この先生は論文では硬い内容ばかりでマニアックだが、実はこんなにもソフトなしゃべりなんだなあ…。」「この先生は想像していたよりも若いなあ。」など自分なりの楽しみを見つけることが出来るのです。私のように英語力が低い人間は、ネイティブイングリッシュを聞くのも内容を理解するのも至難の業ですが、それでもスライドを見ながらなんとか本場の“生の”ABA の発表を体感することが出来

ました。



興味を引かれた発表としては、最近の応用行動分析における流行ともいえる Joint Attention に関するシンポジウムや Jack Michael 先生や Catania 先生など著名な先生によるパネルディスカッションなどがありました。特に私は、行動問題の軽減に関する研究を行っているので、FCT の最近の動向や機能的分析、あるいはスタッフトレーニングや組織行動マネジメントなどのアメリカにおいてすでに実践、導入されているプログラムとはいかなるものかを必死で聴くことが出来ました。

また自身のポスター発表に関してはアメリカでの発表も初めてで、ABA での発表自体も 2 回目でしたので、どの程度通用するのか不安でした。しかし、発表を見に来てくださる方々は、どの方も熱心に質問してくださり、自分の「壊れかけの English」でも私の発表を強化してくださいました。発表を無事(?) 終えてから、これからの自分の研究に多少なりとも自信がついたような気がします。

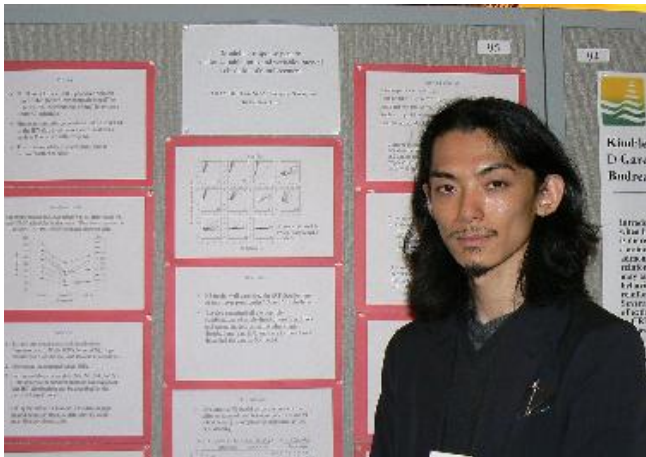
初めてのアメリカでアメリカの空港に降り立っ

たときにアメリカ人のいい加減さを思い知らされた出来事もありましたが、サンディエゴの街並みや海岸を歩くのは気持ちがよくすがすがしい気持ちを味わうことが出来ました。

最後になりましたが、このたび行動分析学会に助成をいただいて、ABAでの貴重な発表、体験をさせていただきました。心より感謝申し上げます。

ABA 体験記 (2): ABA への参加を終えて 慶應義塾大学社会学研究科後期博士課程3年 丹野貴行

今年五月末に San Diego にて開催された ABA に参加して参りました。今回は3回目の参加・発表でありましたが、いつも通りの、とても刺激的な5日間を過ごせました。また会場となった San Diego は、気候が良い、海が近い、治安が良い、現地の人の英語が聞き取りやすい、というとても良い環境で、再び訪れたいと思える都市でした。



行きの飛行機の中では、いつものことながら、分厚い大会プログラムを端から端まで参照し、セッションへの参加と観光をいかに最適に行うかということの思案に明け暮れていました。自分が見たいのは主に実験的行動分析に関わるものなのですが、それでさえかぶってしまっている場合が多々あります。また昼食時と夕食時にポスター発表が割り振られているため、まともに全部見ていたのでは食事さえとれません。そうすると結局は、自分の分野と近いものだけをじっくり見ておこうとなってしまいます。この

点については毎年残念な思いをしますが、それだけ ABA のプログラムが充実している証拠なのだと思います。

そのような中でも絶対にはずせないのが、Society for the quantitative analyses of behavior (SQAB) への参加でした。これは ABA の第1日目と第2日目の2日間に渡って開かれているもので、これまで長年にわたり実験的行動分析学を支えてきた先生方(たとえば今回の日本行動分析学会に來会された Catania 先生)に加え、他分野を専門とする著名な研究者なども多数参加し、最新の研究結果についての報告が行われます。ここで発表されている研究の多くは、いくつかのメジャーな雑誌(たとえば *Journal of Experimental Psychology* 誌、JEAB 誌、*Learning & Behavior* 誌など)ですでに公刊されている、あるいは印刷中であるという、大変にレベルの高いものです。私自身にとって、SQAB においてそれらの研究を本人の口から直に聞くことは、高度な頭脳をもつ研究者達がどのようにしてその問題について考え、そして取り組んだのかを“感じ取る”ことができる点でとても重要なものとなっています。そうやって今年も、レスポンド条件づけにおけるコンパレータモデルで有名な Ralph Miller による、自らのモデルの拡張版を説明する際の論旨の進め方の強烈さや、動物認知で有名な Thomas Zentall による、理路整然とした思考の経過から得られた新たな現象の発見 (within-trial contrast) など、興味深い知見・経験を数多く感じとることができました。

自分のポスター発表は、4日目の午後に行なわ

せていただきました。発表タイトルは、“Modeling response pattern under variable-ratio and variable-interval schedules of reinforcement” というもので、指導教授である坂上貴之先生との共同発表でした。その内容は、Shull, Gaynor, and Grimes (2001, JEAB) 以降の、強化スケジュール下における反応パターン分析の流れに沿ったもので、VR・VI スケジュール下での反応間時間データを最も適切に記述するモデルを、45 個の候補モデルの中から統計的な観点に従って選択した後、そのモデルを使用して両スケジュール下でのパフォーマンスの比較を行うというものでした。これを読んで、なにか難しそうなお話をやっていると感じた方も少なくないかもしれません。ABA において発表を行うことの利点は数多く挙げることができますが、私自身にとっての大きな利点の 1 つとして、ABA ではこう

いった内容であっても聞きにきて下さる方々が幾人もいらっしゃるということを挙げるができます。今回もまた、何人かの先生方が興味を持ってくださり、貴重な意見をいくつも頂くことができました。研究者人数がそれほど多くない分野を研究する者にとって、こういったことは、日本に帰ってから研究を続けていく上での大きな活力となっています。

最後に、このたびの日本行動分析学会からの助成に対しまして、心より感謝の意を表したいと思います。ABA 参加に必要な費用は、貴重な経験を考えれば安いともいえるものですが、しかしそれでも決して軽い負担ではありません。日本行動分析学会から助成は、そういった負担を大きく軽減してくれるものでありました。本当にありがとうございました。

連載: いま, こんな研究しています (2)

立命館大学 吉岡昌子

こんにちは。初めまして、私は現在、立命館大学の心理学研究室で助手をしております。昨年度までは同大学の博士課程に在籍しておりました。今回このような貴重な機会をいただき、大変うれしく感謝いたします。

さて、私はこれまで「聴覚障害がある個人への援助」について、応用行動分析学の観点から研究をしてきました。きっかけは、学部時代に手話を始めたことで、「ろう教育には取り組むべき問題がこんなにもたくさんあるのか!」と驚いたのです。同時に、ゼミ指導教官の望月 昭先生が書かれた論文から、行動分析学に基づきろう重複障害がある個人への援助について学び、その「人と人のかかわりの中に解決策を見出すことを諦めない!」というスタンスに惹かれ、今に至っています。

ここでは、私が博士論文の中で取り組んだ研究(吉岡, 2007)と現状の中での位置づけ、そ

こから見える課題について、少しお話ししたいと思います。吉岡(2007)では、聴覚障害学生が大学で講義を受けるためのノートテイク(話し手の音声をリアルタイムで、一定の割合に短縮し、文字にして伝える通訳のサービス)を取り上げ、その基礎的スキルを高めるための介入手続きを検討しました。介入には、「通訳の範例を見て、自分の通訳結果の正誤を観察し、記録する」という自己記録を用い、単純な数値的フィードバックと比較したところ、通訳スキルの向上に自己記録の効果が見られました。また、セッション中の言語反応から、参加者が生成した自己ルールが、行動変容に影響した可能性が示唆されました。今後、この点についてルール支配行動の視点から検証したいと考えています。

自己記録の手続きは、チェックリストを用いるなどして、職場や学校、スポーツ、セラピーなど幅広い場面で利用されており、その効果は

リアクティビティと呼ばれています。コストレスであることも手続きの利点ですが、さらなる応用価値として、ルールや目標の自発的な修正・設定行動を促進する可能性が指摘されています(例えば、竹内・山本, 2004)。また、自己記録の導入後、対象者の言語反応が増加したというエピソードは、これまでも報告されています。上述した事柄は、こうした知見をより具体化するものだと思います。

加えて、手続きの洗練化における全体的な課題を考えると、理論的観点からの体系的な検討や知見の整理が少ないということが挙げられると思います。これは、Kirby, Fowler, and Baer (1991) が、セルフ・コントロールに関わる応用研究の課題とした、変数間の因果関係の分析よりも、目標とする効果を生じさせることに比重があるということに通じるものです。というのも、リアクティビティに関する理論は、Nelson and Hayes (1981) が「標的行動を最終的に制御するのは遅延して生じる外的な結果事象であり、自己記録の手続き全体(実験者の教示や記録デバイス、記録行動そのもの、その後に対象者が自発した反応など)が標的行動に対する刺激性制御を獲得する」としています。しかし、この観点に基づき、他の変数を統制し、言語化の影響を実験的に検討したものは、Kirby et al. (1991) を除き見られません。

また、個々の領域では、ルール支配行動の視点から、行動観察・記録の過程で生じた言語反応が標的行動に及ぼす影響を検討・考察したものがありません。例えば、スポーツの分野ではMing and Martin (1996)、職場の安全管理の分野ではプロトコル分析の方法を応用したAlvero and Austin (2006) があります。これらは、領域を超えて集約可能な知見ですが、現状ではそのような展開があまり見られません。

その意味で、理論的観点に立ち返り、種々のセッティングでリアクティビティを制御可能にする条件を同定する流れが求められるように思います。さらに、現段階では、言語反応がルー

ルとして機能したかどうか焦点となっています。今後は、それが嫌悪的な文脈でなく、正の強化で自発・維持されているのかどうかにも焦点を当てることが重要だと考えます。こうした展開には、基礎的な知見やアナログ研究が大いに活かされるべきで、それによって、節約的な手続きの洗練が可能になると思います。

自身の領域に話を戻すと、ノートテイクや手話通訳は、まだまだ専門性や身分の確立を必要とするサービス・職域です。例えば、手話通訳では職業的ストレスによる健康悪化が問題となっています。聴覚障害のある個人にサービスを提供する、これらの人々のより良い生活を考えたとき、十分な通訳技術の養成やマネジメントは重要な問題です。行動随伴性という機能的なユニットをもつ行動分析学は、問題の形態にとらわれないという点で、少なくとも、独自の寄与をする可能性があると思っています。

最後に、改めて感謝の意を表し、そして、次の方にバトンをお渡しいたします。

註)文中の「ろう」という表現は、英語の大文字で始まる“Deaf”の訳として用いています。この大文字で始まる“Deaf”は、生物学的損失としての聴覚障害ではなく、機能的な意味での「障害性」に焦点をおく言葉です。その根本には、「ろう」を社会的関係の中で作られる状態と捉え、その関係にこそ障害性を解消する手立てを見出すという価値が含まれています。このことから、本文で最初に「ろう」という表現を用いました。

引用文献(新しいもの):

Alvero, A. M., & Austin, J. (2007). An implementation of protocol Analysis and the silent dog method in the area of behavioral safety. *The Analysis of Verbal Behavior*, 22, 61-79.

竹内康二・山本淳一. (2004). 発達障害児の教科学習を支えるセルフモニタリング. 特殊教育研究, 41(5), 513-520.

吉岡昌子. (2007) 聴覚障害学生に対するノートテイクの正確さと速さに及ぼす自己記録と

自著を語る: 『行動分析』ならびに 『機能分析心理療法』

大河内浩人

本年5月と6月に、上記の2冊がそれぞれミネルヴァ書房と金剛出版から刊行された。前者は総勢20名の執筆陣による著書で、武藤崇先生と私とで編集した。後者は、R.J. コーレンバーグとM. サイの“Functional analytic psychotherapy”の邦訳で8名の先生方に分担していただいた訳を私がまとめた。編者になるのも監訳者になるのも、私にははじめての経験であった。

ほぼ一月の間に著書と翻訳が立て続けに世に出ることになるうとは、もちろん私自身もびっくりである。大げさなたとえだが、ロックミュージシャンならば、オリジナルとカヴァーアルバムを同時にリリースしたようなものだろうか？まさに衝撃のデビューである。ときに、フランボワズ(注)は、どうしているだろうか？

実のところ、たいそうな野心をもって行ったことでもなんでもなく、いくつかの偶然が重なって、2冊が突然世に出ることになっただけである。私の著書や翻訳書は、この先、何年も(不吉なので「永遠に」とは書かない)生まれないかもわからない。

これらの本のあらましや、宣伝文のようなものは、それぞれの「はしがき」や「あとがき」にすでに書いてしまっているのだから、ここでは、2冊の関連性について、メイキングストーリー風に述べようと思う。

「機能分析心理療法」の原書が出版されたのは1991年である。正確には覚えていないが、私はそれからほとんど日をおかずにそれを購入した。当時、行動分析に基づいて成人の臨床ができないものか考えていた私は、この本と機能分析心理療法の存在を知り、「これこそ私が探していたものだ」と声に出さずに叫んだ(「機能分析心理療法」監訳者あとがき、より)。

今で言う「臨床行動分析」、成人の不安障害、気分障害、人格障害などへの行動分析的な外来介入に、当時の私が関心を抱いていたのは、次の理由による。以前にこのJ-ABAニューズレターでカミングアウトしたように、学部時代に実森正子先生(現千葉大学教授)のご講義を聴講して以来行動分析の虜になってしまったのではあったが、大学院を終え、母校の学生相談室の専任カウンセラーを2年勤めた後、1992年に現在の職場に採用されるまで、私はほとんど行動分析の教育を受けていなかった。それまでの私が経験してきた主なるものは、いわゆる普通の実験心理学の方法論にしたがったバイオフィードバックの研究と、行動療法もしくは認知行動療法に基づく成人の外来相談・治療であった。今度の職は、助手といっても独立して研究してよいポジションであったので、長年夢見てきた行動分析の研究をいよいよ始められる、始めたいと強く思っていた。

では、行動分析のいったい何を研究するのか？となると、しかし、「人間を対象とした実験研究」程度の茫漠とした答えしか持ち合わせていなかった。大学院時代という研究者として訓練を受けるべき大事な時期にほとんど行動分析から離れていた私に果たしてまともな研究ができるだろうか？という不安もあった。

もう一つの関心事であった臨床活動も、当時の私を複雑に悩ませていた。できれば、臨床実践と基礎研究活動を両立させたかった。しかしそれには、単純に計算してどちらかに専念する2倍の時間がかかる。勤めもあるので、私にもそんなに時間はない。いきおい、どっちつかずになる。臨床家としてもまだまだ駆け出しである。行動分析の基礎研究は1から始めなけれ

ばいけない。さらに、追い討ちをかけるように私の臨床アプローチが私自身を苛んだ。学生には徹底的行動主義を唱えながら、クライアントには認知行動療法を提供している！

そこで、成人の外来クライアントの治療を行動分析的に行えないものかと考えたのである。「機能分析心理療法」(今日、「臨床行動分析」は機能分析心理療法の上位概念であるが、当時はまだ「臨床行動分析」という呼び名はおそらくなかった、少なくとも一般的ではなかった)これを研究テーマにすれば、上記の悩みは一気に解決するかもしれない。臨床実践と研究活動を相互に乗り入れれば、時間と労力の負担は軽減する。主義と実践が矛盾しなくなる。なにより、行動分析の素人であっても、臨床行動分析という、日本ではまだ誰も手がけていないものをするならば、私にもそれなりの仕事ができるかもしれない。いや、成人外来臨床の経験と行動分析への理解を同時に持つという、(当時の)日本で(たぶん)ただ1人の存在である私にのみ、これは許された仕事に違いない!!!

しかし、結局のところ、私は臨床行動分析を封印した。その決断にいたるまでの過程も述べたいのであるが、長くなるので割愛する。1997年にゼミに入ってきた松本明生氏(現北里大学助教)が臨床行動分析に強い関心を示したときも、私はそれを無視するだけでなく、修士論文で扱うことを禁じた。こうしてまた何年かが過ぎ去っていった。

2003年の秋、K書房の営業のN氏が、私の研究室を訪れ、何か本の企画はないか、尋ねてきた。私は、約10年間暖めてきた「機能分析心理療法」の翻訳の話を持ち出してみた。話はまともりかけたが、原書の出版社に支払わなければならない印税が高すぎるという理由で、流れた。次にN社に持ちかけてみたが、「あまりにも専門的なので売る自信がない」と断られた。翻訳の分担を引き受けてくださっていたある先生から、本屋が決まらなくても翻訳を始めてみてはどうか、という提案もいただいたが、翻訳権

を持たずに仕事を進めるのはあまりにも危険であると思いとどまった。

「機能分析心理療法」の翻訳はほとんどあきらめて、かわりに、翻訳をしてくれることになっていたメンバーを中心に、臨床行動分析のワークショップを日本心理学会で行うことにした。日本心理学会のワークショップというのは、研修会のことではなく、日本行動分析学会の自主シンポジウムに相当する。

少しでも臨床行動分析に興味を持ってくださる方を増やそうと始めた今年で3回目になるワークショップの第1回、2005年の会のあと、ミネルヴァ書房の吉岡昌俊氏から、このテーマで本を書いてみてはどうか、と打診された。大学1回生や初学者に向けて心理療法をわかりやすく伝えるシリーズ、「心理療法プリマーズ」の1冊として、臨床行動分析を出版したいというのである。この話をワークショップの仲間たちに相談したところ、大変前向きな答えが返ってきたので、お引き受けすることにした。

ところが、企画を立て始めて、すぐに壁にぶつかった。このシリーズは、どの本も前半の解説編と後半の事例編の2部構成になっている。例えば、先に刊行された「家族療法」では、12の事例が掲載されている。そんなにたくさんの事例は提供できない。ワークショップのメンバーはまだ手探りで「臨床行動分析」を勉強している段階である。試みに、報告できる事例を募ったところ、せいぜい3-4例に過ぎなかった。そしてメンバー以外で臨床行動分析の事例をわが国で報告した例を、私は知らなかった。実際、皆無ではなかったかと思う。まだまだ行動分析の応用といえば、発達障害児・者の援助が主である。この傾向は本場アメリカでも同じである。

予定を変え、事例編は発達障害の応用行動分析を中心に組むことにした。この方面、私は不案内であるので、武藤崇先生に編者に加わっていただき、人選ならびに執筆交渉をお願いした。「心理療法プリマーズ」シリーズでは、各事例に編者のコメントをつけることになっている。

その仕事のほとんどは、武藤先生と武藤先生を介して依頼した望月昭先生に担当していただいた。内容に対応するよう、タイトルを「臨床行動分析」から「行動分析」に変えた。

こうしてできあがったものを手に取ると、やはり大学1回生には難しい内容になってしまったと思う。その一番の原因は、解説編の章立てにあったと思う。1. 行動分析の基礎知識、2. 随伴性制御、3. 言語行動、4. ルール支配行動、5. 刺激等価性、6. 子どもの応用行動分析、7. 成人の応用行動分析、という構成である。他の入門書と同じような内容ではつまらないと思い、基本的なところは最初の2章に詰め込んだが、やはり、いろいろと大事なところが抜けていた。例えば、データの収集法や一事例の実験デザインなど、事例編で当然のように出てくることを解説編にもっと盛り込めたらよかったと思う。

他方で、すでに行動分析のイロハをご存知のJ-ABA会員の皆様にとっては、この本は読むべきところが多いかもしれない。事例編を分担してくださった井上雅彦先生とサンディエゴのABAの本屋で立ち話をしたとき、「大変いい本だ」とお褒めの言葉をいただいた。なんでも、こ

のように事例をたくさん、しっかりと書いた本は、最近あまりなかったそうである。このような事例集を今後も出していきたいと、とまでおっしゃってくださった。でも、授業の教科書としては使いにくいのでは、との私の問いには、学部専門課程以上のクラスなら問題なく使えるとの答えが返ってきた。

「行動分析」の出版企画が持ち上がった直後、打診していた金剛出版の立石正信氏から、「機能分析心理療法」の翻訳のゴーサインが出た。こうして、2つの出版プロジェクトがほぼ同時に開始し、ほぼ同時に終了した。

(注) フランボワズ: かつて、2名の男子学生の卒論を指導したことがあった。二人は同じバンドで音楽活動をしていた。教員採用試験も受けず、就職活動もせず、インディーズ契約を結んだのを機に、卒業後は「プロになる」とロック一筋に突き進んでいった。そのバンドの名前が「フランボワズ」である。彼らのアルバムを聴きながら卒論以上に熱心にロック指導をしたのは私にとっては楽しい思い出であるが、彼らはそのとき、私のゼミに入ったことを深く後悔していたかもしれない。

次号からのj-ABAニューズの読み方 広報委員会

次号以降、ニューズレター配布方法が変わります

昨年、関西学院大学で行なわれました第24回年次大会で会員の皆様に御回答をお願いした調査の結果をもとに、日本行動分析学会では、ニューズレターの電子配布実現に向けて検討を重ねて参りました。今年8月に行なわれました第25回年次大会会務総会で、ニューズレターの刊行方式を、従来からの冊子体送付によるものと、PDFファイルによる電子配布の2本立てで行うことが承認されました。これに伴い、会員の皆様全員に冊子体のニューズレターをお送りするのは、この号が最後になります。

以下、次号以降の、電子版と冊子体、両方のニューズレターの入手方法について御説明致します。

電子版ニューズレターの入手方法

電子版j-ABAニューズは、次の3つの方法で閲覧、入手、あるいは発行通知を受け取ることができます。

1. ブログかウェブサイトを見る: 行動分析学会のブログ (<http://blog.j-aba.jp/>) と学会ウェブサイト (<http://www.j-aba.jp/>)、発行案内を掲載します。それを御覧戴き、本文をウェブ

サイトでお読み下さい。気が向いたときにウェブサイトかブログを見に来て戴く他には、面倒な手続は必要ありません。

ブログに掲載される新しい情報をいち早く知りたい方は、RSSを設定するようお勧めします。RSS設定の方法については、本号掲載の『j-ABA ニュース発行を知るためのRSS設定の方法』を御覧下さい。

2. 発行通知メールを受け取る: 以下の方法で登録して戴ければ、ニューズレターの最新号が発行されたときに、発行通知と目次をメールでお送り致します。ニューズレター発行をいち早く知りたいが、本文全体をメールで受け取るのは煩わしいという方には、この方法をお勧めします。

登録の方法:

1. imailsrv@j-aba.jp宛てに登録メールをお送り下さい。
2. 登録メールの件名 (Subject) は、空欄にして下さい。
3. メール本文には「subscribe infoNL ニックネーム」(「」は不要)とお書き下さい。単語は全て半角で、単語の間には半角スペースを入れて下さい。ニックネームは、このサービスの登録、登録削除を行なうとき、あなたを確認するための名前です。本名である必要はありませんが、登録削除に必要ですので、お忘れにならないようお願い致します。

登録削除の方法:

発行通知メールが不要になったら、以下の方法で登録削除して下さい。

1. imailsrv@j-aba.jp宛てに、登録削除メールをお送り下さい。
2. メール の 件 名 (Subject) は、空欄にして下さい。

3. メール本文には「unsubscribe infoNL ニックネーム」(「」は不要)とお書き下さい。単語は全て半角で、単語の間には半角スペースを入れて下さい。ニックネームは、このサービスに登録したときに使ったあなたを確認するための名前です。

このサービスの登録 / 登録削除は、全て御自身で行なって戴きます。ニューズレター編集部、広報委員会、事務局は、アドレス登録 / 削除にはお応えできません。

ご注意: 登録、登録削除が受け付けられると、infoNL-owner@j-aba.jp という差出人から通知が届きます。またニューズレター発行の通知は「System Administrator <root@j-aba.jp>」という差出人名義で送信されます。迷惑メール防止などのために、このような単語を含む差出人からのメールを拒否する設定をなさっていると発行通知を受け取れなくなります。ご注意下さい。

3. ニューズレター本文をメールで受け取る: 以下の方法で御登録戴くと、PDF形式のニューズレター本文を添付したメールを、発行の度に受け取ることができます。

登録の方法:

1. imailsrv@j-aba.jp宛てに登録メールをお送り下さい。
2. 登録メールの件名 (Subject) は、空欄にして下さい。
3. メール本文には「subscribe jabaNews ニックネーム」とお書き下さい。単語は全て半角で、単語の間には半角スペースを入れて下さい。ニックネームは、このサービスの登録、登録削除を行なうとき、あなたを確認するための名前です。本名である必要はありませんが、登録削除に必要ですので、お忘れにならないようお願い致します。

登録削除の方法:

発行通知メールが不要になったら、以下の方法で登録削除して下さい。

1. imailsrv@j-aba.jp 宛てに、登録削除メールをお送り下さい。
2. メールの件名 (Subject) は、空欄にして下さい。
3. メール本文には「unsubscribe jabaNews ニックネーム」とお書き下さい。単語は全て半角で、単語の間には半角スペースを入れて下さい。ニックネームは、このサービスに登録したときに使ったあなたを確認するための名前です。

このサービスの登録 / 登録削除は、全て御自身で行なって戴きます。ニューズレター編集部、広報委員会、事務局は、アドレス登録 / 削除にはお応えできません。

ご注意: 登録、登録削除が受け付けられると、jabaNews-owner@j-aba.jp という差出人から通知が届きます。またニューズレターは「System Administrator <root@j-aba.jp>」という差出人名義で送信されます。迷惑メール防止などのために、このような単語を含む差出人からのメールを拒否する設定をなさっていると発行通知を受

け取れなくなります。ご注意下さい。またニューズレター本文は 500 K byte 程の容量がございます。予め御承知おき下さい。

冊子体の送付継続を御希望の方へ

ニューズレター 48 号以降も、御希望の方には、従来通り冊子体をお送り致します。

冊子体の送付継続を御希望の方は、氏名、所属、送付先住所の 3 つを明記し、「冊子体ニューズレター送付継続希望」の旨をお書き戴き、E-mail か fax か葉書で、下記、日本行動分析学会事務局宛てお送り下さい。申込締切は 2007 年 10 月 31 日到着分までと致します。この締切日以後は、毎年の年度会費納入手続の時期に合わせて、配布方式の希望確認を致します。

申し込み先:

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学文学部心理学研究室内

日本行動分析学会事務局

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

FAX: 075-465-7882

(fax は日本行動分析学会事務局と宛先を御明記下さい)

今後とも『j-ABA ニュース』を宜しくお願い致します。

j-ABA ニュース発行を知るための RSS 設定の方法

廣江美恵

RSS とは、ウェブサイトやブログの情報更新をいち早く知ることができる仕組みです。日本行動分析学会のブログは、この機能に対応していますので、皆様がお使いのブラウザを設定することで、ニューズレターの発行も含め、学会ブログに掲載される新しい情報を、いち早く手に入れることができます。ここでは、広く使われているウェブ・ブラウザ Internet Explorer 7 を例に挙げて、日本行動分析学会ブログへの RSS 設

定の仕方を御説明致します。

1. 日本行動分析学会のページにアクセスし、「日本行動分析学会からのお知らせは、随時 blog にて公開しております」をクリックし、日本行動分析学会からのお知らせにアクセスします。



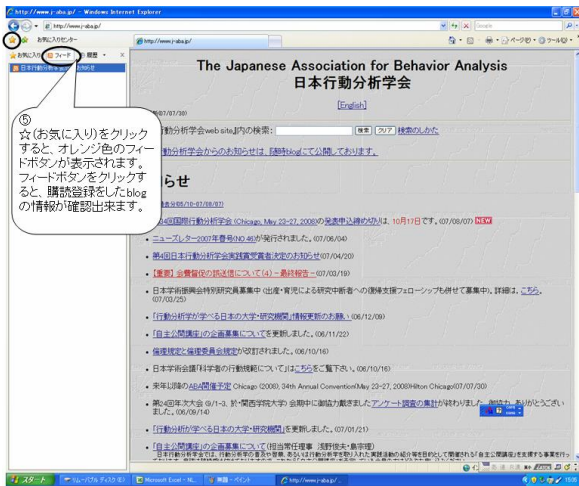
2. RSS 対応の blog にアクセスすると、IE ブラウザの右上にある RSS ボタンが、灰色からオレンジ色に変化するので、クリックします。

4. 「このフィードの購読」というウィンドウが popup しますので、「購読」ボタンをクリックします。



3. 遷移したページの左上部に、「このフィードを購読する」という青色の文字が表示されますので、ここをクリックします。

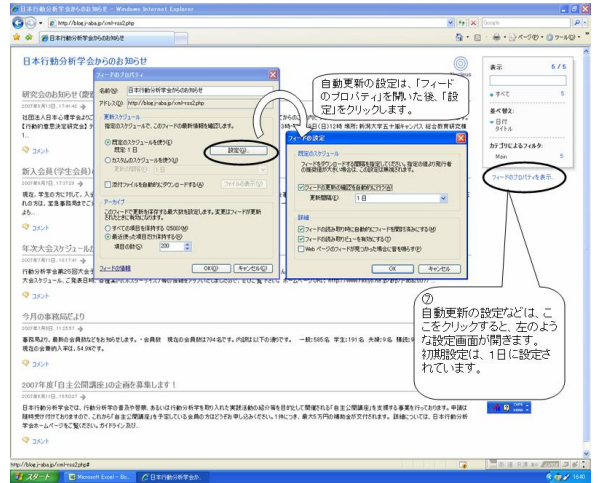
5. ブラウザ左上部にある、お気に入り（黄色い星マーク）をクリックすると、「お気に入り・フィード・履歴」というアイコンが表示されます。その中から、「フィード」を選択すると、「日本行動分析学会からのお知らせ」が追加されていることが確認出来ます。



6. 登録した情報をクリックすると、更新情報を確認することが出来ます。



7. 更新情報を確認するページでは、右上部にある「フィードのプロパティの表示」で、更新確認の為の設定を行うことが出来ます。



日本行動分析学会 blog での初期設定は、1日毎の自動更新が設定されています。

編集部注: 原稿には、設定の途中経過を示すコンピュータ画面のスクリーンショットが付けて下さいましたが、印刷では細部を再現することができないと判断し、割愛致しました。電子版にはスクリーンショットを掲載しております。

事務局長交替のご挨拶 武藤崇・大河内浩人

9月末より1年間、学外研究(国外)のため、学会事務局長および常任理事の仕事が遂行することができません。誠に申し訳ございません。私が不在の1年間は、大河内浩人先生に事務局長代理をお願いすることになりました(大河内先生、よろしく願いいたします)。会員の皆様には、今後ともよろしくご協力のほどお願い申

し上げます。(武藤 崇)
本年10月より、1年間、海外出張の武藤崇事務局長の代理を務めることになりました。いろいろといたらないところがあるかと思いますが、なにとぞ、よろしく願いいたします。(大河内浩人)

事務局だより 事務局

事務局・常任理事会の各委員会からの会員の皆様へのお知らせは、学会ホームページの他に、学会ブログ (<http://blog.j-aba.jp/>) においても随時掲載されております。是非、ご高覧くださいますようお願い申し上げます。

編集後記 ニューズレター編集部

今回、皆様の御理解と御協力を得て、ようやくニューズレターの電子化という新しい一歩を踏み出すことができました。また、今回の47号は、なんと20ページという内容になりました。これも偏に、会員の皆様（と、重量を気にしないで済むクロネコメール便）のお蔭と感謝しております。次号からは、海外で行動分析学を学んでいる、あるいは研究している方々から、海外行動分析学事情を連載でお届けする予定です。御期待下さい。

ニューズレター編集部よりお願い

- ニューズレターには個人情報に記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析

学会ウェブサイトで公開いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359
帝京大学文学部心理学科内
日本行動分析学会ニューズレター
編集部 望月 要
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp